

出版稲門会 会報

◎巻頭言：海外で日本文学・文化と文学館の魅力を伝える 十重田裕一（1頁）
◎寄稿：天野美生／川又民男／木所隆介／田中正裕／河内卓（2-3頁）
◎学而時習之：五味英隆（4頁）

●発行 出版稲門会 〒110-0016 東京都台東区台東2-24-10
株新星出版社 内 電話 03-3831-0743
●発行人：筑紫恒男 ●編集人：富永靖弘
●018号 2023年10月1日発行 題字：服部敏幸

2023年4月から2ヶ月間、UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）客員教授としてロサンゼルスに滞在する機会を得た。米国だけでなく、イギリス・イタリア・カナダ・中国などから留学してきた受講生たちに、上梓したばかりの拙著『川端康成孤独を駆ける』（岩波新書、2023年）とロバートキヤンベルさん、宗像和重さんと編集した『東京百年物語』全3巻（岩波文庫、2018年）の第2巻をプレゼントし、セミナーの参考文献として活用した。川端康成は日本で最初にノーベル文学賞を受賞した作家であり、米国では谷崎潤一郎・三島由紀夫とともに「ビッグ・スリー」と称されたこともあって、日本文学・文化を専攻する大学院生たちは関心を示してくれた。それと同時に、川端が魅力的な装幀の数々の書物を上梓し、その小説の多くが映画化、テレビドラマ化されていることに興味を持ち、また、東京を舞台とする小説にも心惹かれたようだ。メディアに関心を持つ大学院生たちがセミナーのメンバーだったこともあり、

この原稿を書いている現在は、スタンフォード大学客員研究員として、サンフランシスコ近郊のパロアルトに滞在している。UCLAに引き続

き、8月の1ヶ月間、スタンフォード大学教授・大学院生たちとともに日本の文学・文化について研究するためである。滞在中は、研究室で共同研究の打ち合わせをし、大学院生の研究指導をする日々を送っている。UCLAの図書館と同様に、スタンフォード

くは、スタンフォード大学図書館に寄贈し、海外の研究者たちに活用してもらおうと考えている。

米国滞在の目的は、次世代の日本文学・文化の研究者を育成するためであると同時に、館長をつとめる早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）の魅力を伝えるためでもあった。柳井正さん、村上春樹さん、隈研吾さんの多大なご尽力により国際文学館は2021年10月に開館し、国内外から多くの方々をお迎えすることができた。UCLAとスタンフォード大学の大学院生や教授たちにも国際文学館に足を運んでもらいたいと考え、館の魅力について話したところ、早速、UCLAのセミナーに参加していた英国ケンブリッジ大学の大学院生が来日し、文学館を訪ねてきてくれた。

これからも、国内外の多くの方が訪れたいと思うような、国際的・民衆的な文学館を目指し、日本文学・文化と文学館の魅力を広く国内外に伝えていければと思う。

（文学学術院教授・国際文学館館長・昭62一文



十重田裕一

海外で日本文学・文化と文学館の魅力を伝える

学而時習之



サステナブルな出版流通を後世に

五味英隆

丸善CHIホールディングスの新社長として今年4月に就任しました。この度、出版稲門会に参加でき大変光栄です。私は大学で物理学を専攻し、卒業後は大日本印刷で電子写植・製版のシステム開発に従事。縁あって2014年から当社執行役員として関わってきました。

当社は「知は社会の礎である」という経営理念のもと、グループ企業である丸善出版は理工系の専門書籍の出版を、丸善ジュンク堂書店、丸善雄松堂、図書館流通センターが書店事業や大学・公共・学校図書館向け書籍販売及び運営受託を行っています。紙の出版市場が縮小する中で、地域創生を促す取り組みや電子図書館・教科書など新たな事業に注力しています。

「ご存知のように、日本の出版市場は1996年のピークから大きく減少。コミックは紙の減少に対し電子が急増し、新たなIPビジネスも盛んになってきました。文字もの書籍では紙が一定の存在感を維持する一方で、電子は伸び悩んでいます。雑誌は紙と電子の両方で大きく占有率が低下しています。私は、書籍やコミックは著作者の知

識や努力の成果を発表する媒体として、著作者の調査・創作時間を買うメディアだと考えています。読者はそこから学びや感動を得て、価値観を養い人生に役立てることが出来ます。また、雑誌は多様な意見やアイデアを広く受け入れ、民主主義の根幹を担うユニケーション手段として重要であり、校閲のないネット情報が溢れる中で、市場縮小に懸念を感じています。私自身について言えば、ドリトル先生シリーズや講談社ブルーバックス、歴史書などが私の人生に大きな影響を与え、音楽雑誌は音楽愛好者として成長する手助けとなり、フアッション誌などからも影響を受けました。これらの経験から、サステナブルな出版流通を後世に残し、出版業界への恩返しをしたいと考えています。

最後に、「知は社会の礎である」を掲げる当社の経営理念に基づき、出版業界に感謝の気持ちを込めながら、自身も成長して恩返しをしていく覚悟です。知識と情熱が詰まった出版物が、私たちの社会を豊かにし、未来へつな

がっていくことを信じています。

（丸善CHIホールディングス社長・昭61大学院理工学研究科

出版稲門会・令和5年度(第39回)総会のご案内

記

日時：令和5年11月10日（金）17:30～（受付17:00～）
会場：早稲田大学大隈会館 3F会議室（第2部以降）
〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1丁目104
TEL.03-3202-8040

式次第：（第1部）国際文学館（村上春樹ライブラリー）見学ツアー 16:00～
※参加希望者は16:00までに国際文学館前に集合
（第2部）総会 17:30～
（第3部）講演会 17:45～18:30
テーマ：「国際文学館の魅力」（仮）
登壇者：十重田 裕一氏（文学学術院教授・国際文学館館長）
（第4部）懇親会 18:45～20:20

会費：8,000円（40歳未満は5,000円）
※お差し支えなければ当日、別途年会費（9月1日現在50歳以上5,000円、50歳未満3,000円、初参加者無料）をお預かりいたします。

編集雑記

▼会報へのご寄稿ならびに総会での講演を引き受けてくださった国際文学館（村上春樹ライブラリー）の十重田館長に感謝申し上げます。先生とお会いしたのを機に日本の近代文学を読み直してみたいと思います。また総会前に実施予定の国際文学館見学ツアーにご尽力いただける大前事務長にもこの場を借りて御礼申し上げます。

（北口克彦・昭56政経）

▼コロナ禍による行動制限もなくなり、酷暑にもかかわらず世間は楽しいイベントがいっぱい。にもかかわらず、本だけは売れていない。家族の事情でどこにも行けなかったこの夏は、積読を減らそうと読書三昧だが気が付くと新刊を買ひ足し、本は減らない。こんな人があと数万人位いないでしょうか？

（富永靖弘・昭59商）

早稲田界限

▼感染症法「5類」に移行したコロナ。公表される感染者数は全数から定点把握数に。数字の印象は収束したかのようにだが、まるで追力なし。だが、感染は未だ収まらない。今、押し寄せるは第9波。活動再開の運動部やサークルの集団感染がつづく。今やコロナと共に生ずる時代だと覚悟する。

▼夏の甲子園。慶應旋風で1007年ぶりの栄冠獲得。大応援団は「陸の王者」で球場を支配。さくら長髪の「美白王子」丸田遼斗選手

の人氣が沸騰した。17年前、早稲田の「ハンカチ王子」斎藤樹佑氏（平23教）が人氣を独占、「紺碧の空」が轟き、「早稲田の栄光」を聴いたのが懐かしい。

▼優勝メンバー3年生は内部進学して慶大野球部に加わるはずだ。早慶戦で相まみえる早大野球部は、早速、優勝を祝福し喝采のエネルギーを贈ったという。特異友好のライバル同士だ。ちょいと、いい話ではないか。

▼早稲田は何でもありの大学で多様性を尊ぶ。だけれど、こんな醜態はまずいだらう。大学院のW教授が7年前に入學した女子学生に

「俺の女にしてやる」などと迫るセクハラ事件のことだ。地裁に訴えられて事が覚悟する。なんこの男、文学界では名だたる文芸評論家でもあった。

▼今、音楽プロデューサーで活躍する松尾潔氏（平2文）も在學時Wにひどい暴言を浴びせられたと知る。地裁判決は今年、Wだけでなく大学側にも賠償金支払いを求めた。発覚後もWを庇い立てる教官がいたらしい。残念ではないか。その時すでにWは解雇されていた。

（園師尚幸・元六編社ほるぶ出版社長・昭43法）

来年は、 第100回記念大会



天野美生

皆様、2024年のお正月のご予定は、すでにお済みでしょうか。我が家の場合は毎年、1月2日・3日＝箱根駅伝。朝から母校愛に目覚め、実家を含め、家族中で、箱根駅伝の応援で盛り上がります。

私は、横浜出身。花の2区、権太坂に位置する高校に通っていたこともあり、箱根駅伝は大学入学前から身近な存在。テレビに映し出される保土ヶ谷から

権太坂に至る道は、まさに懐かしいの通学路。そして大学在学中には、早稲田の優勝（1993年/当時、2区の権太坂を走ったのは、その後、早稲田の競走部駅伝監督を務め、箱根駅伝のテレビ解説でもお馴染みの渡辺康幸さん）もあり、ますます応援にはまり、現在に至ります。

今回の箱根駅伝は、第100回記念大会。例年より3枠多い23校で、関東以外の大学にも門戸を開く形で開催されます。

ここ数年は、コロナ禍による沿道での応援自粛要請もあり、テレビ観戦が続いていますが、以前は、しばしば実家近くの沿道で応援。

沿道では、中継ヘリの音が響いてくると、「そろそろ来るね」となり、続いて、大会運営車や中継車の姿が見え出すと、各大

学の応援団が盛り上がりはじめますが、選手が通り過ぎるのは本当に一瞬。そのスピードには毎回、驚かされます。

選手が来るまでは、早稲田の順位や、子どもの大学の順位ばかりが気になるのに（こまめにスマホでチェック）、各大学の選手が姿を現しはじめ、そしてそのひたむきな走りを目の前にしてしまつと、もう「どこの大学」といった意識はなくなり、通り過ぎる選手全員を「がんばれー」と応援。沿道には爽やかな一体感が生まれます。

来たる第100回記念大会、早稲田は、すでにシード枠での出場権を獲得済。久々に沿道での応援を楽しむつもりです。沿道の賑わい、そして、選手が駆け抜けていく姿が楽しみです。

（トランス執行役員・平6教育

優勝が 見たかった



木所隆介

大学から徒歩圏内の会社に勤めて35年、大学には1回しか入

ったことがありません。現代新書はじめ書籍は数十冊作りましたが、著者に早大の先生やOBは皆無。FRIDAY時代には竹下、小淵、森、野田元首相をずっと苛立たせてきました。寄付はもちろんしていませんし、早大レカも持つていません。稲門会関係の活動もせず、本欄に書く資格など本来何もない人間です。

なぜこんな早稲田愛の薄いこ

とになってしまったのか？ 在学していた4年間、野球部もラグビー部も優勝に無縁だったことが関係していると思つていま

入学前年の82年秋にはエース小暮で野球部が優勝。ラグビーが日本一になるのは卒業直後、藤掛、堀越、今泉の1年生トリオが大活躍した87年シーズンでした。在学中は慶應を応援するほうが幸せだったのです。

都の西北、 早稲田の隣



川又民男

はじめて一人暮らしをした中落合の下宿アパートの二軒隣の家の玄関前には、ふてぶてしく佇むシロクロの猫がしゃがんで

いた。頭を撫でてみてもピクリともしない。嫌がるわけでもない。お前に頭を触らせてやっていい、自分は全然気にしてないけどといった風である。これがテレビやコーマーシャルで見ていたあの有名な猫ちゃん「菊千代」か。だってその家は、赤塚不二夫の自宅兼事務所なのだから。

夕方になると、バカボンのパパみたいな格好で洗面器を小脇に抱え、妙正寺川を渡って踏切向こうの銭湯にお出かけになる赤塚先生のお姿をよく見かけた（編集者か娘さんか、時には綺麗な女性と連れ立って）。なので、昨年「STOP! 海賊版『転載はバカボン』キャンペーン」でバカボンのキャラクターたちに協力してもらったときは嬉しかった。その赤塚邸も老

朽化で今年取り壊しになるとい

今年3月に、恩師の島田陽一先生が早稲田を定年退職された。大学ラグビー部部長や、早稲田大学出版部の社長、副総長等を歴任し、総長選で現総長に惜しくも敗れた。現在は「なんちゃって弁護士」（本人談）をされている。

自分は島田ゼミの1期生なのだが、いまだに先生から全ゼミ卒業生の前でも言われるのが、お前は同志社との合同ゼミ合宿の際、べろんべろんに酔って行方不明となり、両大学で山狩りまでして探しまわったんだぞというところである。振られてひどく管を巻いていたとかで、そういう状態なので当該記憶はほぼないのだが、空き部屋でガーガー軒をかいて寝ていたそう

ゼミ卒業生は法曹関係や有名企業も多いなか、分りにくい業務のためか、何度説明しても先生からは「お前いま何やってんだっけ？」と聞かれる。自分でもこんな仕事があるとは知らなかったが、本が好きで辿り着いた。近頃は、読書と酒を飲んでいる時間と、どちらが長いのか分からないが、聞こえてくる内なる声は、「これでいいのだ！」。

（日本書籍出版協会事務局長・平10法

大学時代の遺産が 良い扶持



河内卓

この6年で、3回自転車で転倒した。1回はあばらを折り、もう2回は同様に前歯が折れ、目の周りと腕にはつきりと傷を残した。そのため、写真のように今は自転車に乗るときは大げさなヘルメットをかぶっている。この10月で40歳。先輩達に言わせれば、まだまだ若輩者。しかし毎日自転車通勤していた大学時代は一度も怪我をしなかった。当たり前だが、年を取ったのだ。ヘルメットの下の髪はうすくなって、もうない。

今の自分は、大学生のときとは違う。でも、明らかにその延長上にある。新星出版社から筑摩書房に転職して10年。新書を8年作った後、一昨年から文庫編集部に移った。新書の際は薬物依存症、教育格差、香港の抵抗運動、中東・イスラムへの誤解……重要と思つてマの本を社会に向け

て投げこむ仕事が多かった。と

ころが文庫は全然勝手が違った。主に品切れの小説やエッセイの良書を探して復刊する、という仕事だったのだ。

その仕事の多くが、学生の時の読書の延長にあった。たとえば翻訳者の藤本和子さんのエッセイ「ブルースだつたの唄」『イリノイ遠景近景』を復刊したが、それは大学生の時に友人Mに教えられたアメリカの作家ブローティガンの藤本さんによる訳を読んだことが起点にあった。小沢信男さんの65年分の仕事から作品を選んだ『ぼくの東京全集』も学生の時にMに教えられた『東京骨灰紀行』がスタートだし、ブレイズ・サンドラール、管啓次郎さん、山崎佳代子さん、柴崎友香さんなど文庫を作った著者の多くが、学生のときに作品を読み、感銘を受けた人だった。

結局のところ、気の赴くまま存分に本を読むことができた学生の時の遺産で食っている。そして、それはこの先も続く。大学生まで本を読む習慣がなかった自分がこうして仕事をできているのは、いろいろ教えてくれた大学の友人や先生たちのおかげなのだ。文庫を1冊出すたびに、その出会いに感謝する。

（筑摩書房・ちくま文庫編集部編集長・平18教育

集まり散じて 人は変われど



田中正裕

会報への寄稿を仰せつかり、さて何を書いたらいいのだろうと考えてみると、頭に思い浮かんでくるのは仲間たちとのワセメシやババメシ(?)の記憶。

私は早稲田実業学校高等部出身で、高校時代から「都の西北早稲田の杜に」どっぷりつかっています。まず、高校の応援委員会の同期たちと通つたのは「メルシー」「わせたの弁当屋(わせ弁)」。未だに猛烈に食べた

そんな私がなぜこの原稿を書くかと思つたのか？ 私と同じ講談社広報室にいた3学年下のHさんのおかげです。学生時代は「クイズ研究会」でTVに出まくり、入社後は週刊誌やグルメ誌で大活躍しながら、神宮球場に通い、特に斎藤佑樹を溺愛しました。また、ハルキストとして国際文学館関連イベントを全制覇、今年の春は、村上さんの新作を10冊も購入しました。

なる、私の血と肉です。大学に入ってからは野球の授業で一緒になった仲間と「がんこラーメン」に通い、三国志研究会の仲間とは「芳葉」。「まほうつかいのでし」にもよく行きました。日本酒好きになったのも大学の仲間で行つた「洒落高田馬場」だし、ゼミの仲間と「珍珠」にも行つたなあ……。いくつかのお店は閉店してしまいましたが、やっぱり早稲田を「心のふるさとわれらが母校」と思つたのは、その時々

の仲間たちと交流があつて、食事をしたり、飲んだりして盛り上がる、ということ。「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想の光」とは早稲田大学校歌のなかでも白眉の名フレーズですが、社会人になつてしばらくして友人と早稲田の名居酒

屋たちをはしりして深夜の大隈講堂前で横になったのはとても良い思い出です。日販にも多くの稲門の仲間がおります。「日販稲門会」と称して毎年集まっていますが、コロナ禍で対面開催できずにおりました。今年こそはと思ひ、幹事を務めてくれた後輩に打診をしたら「ぜひやりたい」とのこと。オンライン中心の学生生活を送ってきた若手社員も交えて、今年も稲門の絆を再確認する年に行きたいと思ひます。

この会報を読んでいたという皆さまも「稲門の仲間」として交歓できることを楽しみにしております。みんなで「いざ声そろえて、空もとどろに」校歌を斉唱しましょう！

（日本出版販売・C.V.S.部・M.D.推進チーム係長・平15法